

日光山常楽寺の九重塔

にっこうさんじょうらくじのきゅうじゅうのとう



文化財愛護シンボルマーク

名称	常楽寺石造九重塔	所在地	加古川市上荘町井ノ口 158 番地
別称	常楽寺の十三重塔	所有者	常楽寺
数量	1 基	指定	兵庫県指定文化財
寸法	総高 457.5cm	指定分類	建造物
材質	石造、花崗岩製	指定名称	石造九重塔
時代	鎌倉時代後期、13・14 世紀	指定年月日	昭和 52（1977）年 3 月 29 日



日光山常楽寺の九重塔

上荘町にある常楽寺は、播磨八薬師霊場にも数えられ、「日光山のお薬師さん」として親しまれている真言宗の寺院です。大化5（649）年に法道仙人によって開かれたと伝われます。中世頃は、永仁2（1294）年に伏見天皇から「日光山」の称号を授かったとされており、大寺院として栄えていたと考えられています。

この層塔は、本堂の北に面する山裾の一面に据えられており、別造りとみられる基礎の上に花崗岩製の塔身と笠が連なっています。なお、相輪は欠失しています。

塔身は、やや縦に長い形で、各面の中心より少し上に金剛界四仏の種子が刻まれています。現在の正面（南面）に^{ふくろうじょうじゆによらい}（アク・不空成就如来）があるため、元々の配置から180度回転した状態で置かれているようです。本来南を向くはずの北面には、^{ほうしょうによらい}（タラク・宝生如来）の下に奉籠孔が設けられています。



塔身 拓本



塔身北面の奉籠孔



笠は、軒とその上の軸を一石で造る形式で、現在は9層積まれています。層塔の笠は、下層から上層に向かって規則的に小さくしていくことで均整の取れた美しさを生み出しますが、この塔を見ると、最下層と2層目、8層目と最上層の間の開きがほかと比べてやや大きいため、何層かの笠が失われているとみられます。塔全体の規模感からすると、本来は十三重塔として造立された可能性があります。

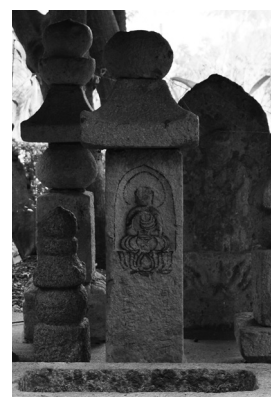
この塔は、完全な姿ではないものの、鎌倉時代後期の優れた様式をよく残しており、中世の加古川地域の隆盛を今に伝える貴重な石造文化財のひとつです。

また、常楽寺には、中世から近世にかけての石造遺品が数多く見られます。多聞谷池南西側の斜面にある凝灰岩製の三重塔は、鎌倉時代中期のものと考えられ、市内でも最古級の石造層塔です。参道の東側、覆い屋の下に祀られている石塔や石仏のうち中央にある笠塔婆は、永徳2（1382）年に建てられたもので、町石としての役割があったことが塔身の銘文から読み取ることができます。

（拓本／『加古川市史』より転載、文・写真／古林）



三重塔



町石笠塔婆

層塔 屋根を奇数に積み上げた多層の仏塔。石造の層塔は白鳳期頃から現れ、以後は主に供養塔や墓塔として造立された。多くは基礎、塔身、笠、相輪で構成される。

奉籠孔 経典や供養品などを入れるために穿たれた穴。

町石 寺院の参道に一町（約109m）ごとに建てられた石標。

●参考文献

- 『加古川市史 第7巻』加古川市（1985年）
- 『日本石造物辞典』日本石造物辞典編集委員会（2012年）
- キーワード 石造層塔 十三重塔 常楽寺 法道仙人
- 所在地 兵庫県加古川市上荘町井ノ口158番地
- 交通 JR加古川線「厄神」駅から北東方向へ約40分
車は東播磨南北道路「八幡稲美IC」から北東方向へ約3.7km